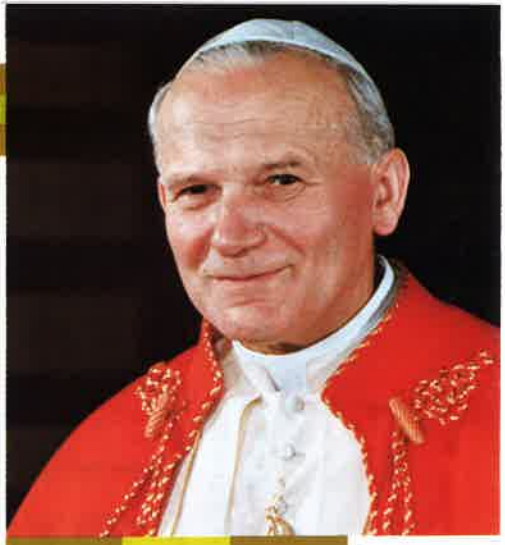
平成7年（1995年） 4月10日 教皇様の声 （昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
4 APRIL,1995 毎月10日発行 第180号



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1995
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

復活されたキリストのうちに生きるため

★ 復活祭を迎えた私たちは心はずませてキリストの復活の神秘を祝います。託身して人類の一人としてお生まれになった神の御子の生涯が、復活の秘義のうちに完成します。死に打ち勝った救い主の勝利は、啓示の中でも光り輝く「出来事」です。復活祭が典礼暦年中最も大きな祝日とされるのも無理はありません。

主の復活はキリスト教に特有の喜びの雰囲気を与えています。あふれる喜び、よみがえった師を目の当りにした婦人たちと弟子たちが味わったのと同じ喜びです。復活したキリストはもはや死ぬことはなく、復活のもたらす結果も消えることはないので、これは終りのない喜びです。復活の日の歓喜は、尽きない喜びとして教会に引き継がれ、世の終りまで人の心を満たしつつ大きくなってゆきます。

私たちもこの喜びに招かれています。過越の秘義が日ごと新たに繰り返される、聖体の秘跡を通して与えられる喜び。そこでは秘跡によって神秘的な方法で、復活の秘義を頂点とするキリストのいけにえが現存します。私たちの内なる恩寵の生命は復活したキリストの生命です。恩寵を通じて私たちは喜び踊り、イエズスが約束されたように（ヨハネ16・22）その喜びは奪い去られることがありません。

★ しかし、復活に先立つ出来事から目をそらすことはできません。復活の勝利は、キリストの贖いのいけにえを前提とするのです。

神である師は、復活について何度もお話しになると同時に、まず苦しみという道を通らねばならないと強調なさいました。自分の使命は御父の御旨に従っていけにえとなることによって果たされるのだとイエズスは教えたかったのです。

復活祭の喜びの中にも、十字架を通して人類の救いを勝ち取った救い主の苦しみを忘れることはできません。キリストの救いの使命において、十字架は不可欠の役割を担っています。「キリストはこれらの苦難を受けて栄光に入るはずではなかったか。」（ルカ24・26）

それならば、十字架の定めが私たちの人生にも当てはまるからと言って、驚くことがありましょうか。十字架はイエズスの生涯と救いのわざに深く結び付いていたのです。今なお痛ましい苦しみの秘義に直面し、落胆や絶望にさらされている人々は、キリストが教え、自ら生きた真理、すなわち十字架は私たちの生活に必要であり、愛の勝利へと続く道であることを思い起こさねばなりません。

私たちは復活の喜びを共にするために、キリストの贖いのいけにえに一致するよう招かれています。だからこそ教会は、全て苦しむ人、試練にあえぐ人々に、希望あふれる言葉で語りかけるのです。「その悲しみは喜びに変る」（ヨハネ16・20）とは、イエズスの約束です。

★ エンマウスへの途上で、イエズスは救い主の復活が理解できない弟子たちの信仰不足を叱りました。復活したキリストの姿は新しい生命の証でしたが、弟子たちはすぐにそれとは分からなかったのです。復活は、信仰の同意を必要とする秘義です。

それでもヨハネは空の墓を見て師の復活を悟り、トマははじめ証拠を要求しましたが、イエズスを見て「私の主、私の神」と叫びました。（ヨハネ20・28）イエズスは「あなたは私を見たから信じたが、見ずに信じる人は幸いである」（同20・29）と仰せになりました。

見ずに信じるよう招かれた人は、誰も復活後のイエズスを見たことがありません。私たちもその一人です。従って、キリストの復活への信仰に召された私たちが、トマと共に「私の主、私の神」と叫べるなら幸いなことです。

★ 三日目に何が起こったのでしょう。復活の現場を見た者はいませんが、救い主は死から、より高い天国の生命に移り、その御体は聖霊に満たされました。

こうして栄光に満ちた主の御体は、十字架に付けられた同じ体ですが、今や私たちの体にまさる特性を帯びています。復活後のイエズスは生前の存在に戻られただけではありません。姿を見せたのは信仰に開かれた人々の前だけでした。その時には閉ざされた部屋にも思いのままに出入りし、ご自身の真の生命が天国に属することを示されたのです。

四〇日後、イエズスはついに地上を離れ天に戻られました。この時から主は、ご自分を満たす神的生命を全人類に広め始められました。主は私たちの救いを全うし、神的生命を分け与えるために復活されたのです。「私が生き、あなたたちも生きるからである。」（ヨハネ14・

説教・講話・書簡等の抄訳

19）地上を去る前、イエズスは聖霊の派遣を告げます。復活した御体を満たす聖霊の命が人類をも満たし、皆が復活の恩恵にあずかるよう望まれたのです。

★五旬祭の日に、約束された聖霊が婦人たちと使徒たちの上にくだり、彼らをキリスト復活の証人とすることでしょう。こうして教会が生まれ、それ以来、復活のキリストは聖霊によって信者の内に生きています。さらに各人の内に、キリスト同様「神の子」としての生命がつちかわれます。私たちはイエズスのように、「アッバ、父よ」（ローマ8・15参照）と叫ぶ、子としての祈りを捧げることができるのです。

他方、聖霊は復活のキリストへの信仰を同じくする人々を一つに集めます。聖霊は共同体を作り、命を吹き込み、キリストがこの世に燃え立たせようとした愛、すなわちキリストが愛されたように互いに愛しあえという新しい掟（ヨハネ13・34、15・12参照）を受けた人々の間の絆をはぐくまれます。

神の驚くべきわざを宣べ伝え始めた使徒たちを動かしたのは満ちあふれる復活祭の喜びでした。その喜びは、聖霊の力で絶えず新たに広がって行きます。

★復活したキリストを見つめて信仰を固め、キリストの証人となる決意を新たにしましょう。キリストは私たちの希望の源であり、キリストを満たす聖霊が私たちと共にあるので、私たちはこの世で新たな不思議のわざを成し遂げることができるのです。

勝利のキリストから送られる愛の力で、憎しみ・敵意が克服できますように。生命に満ちたキリストから、神の子として生きるのに必要な喜びを受け、天の御父のように完全になるよう（マテオ5・48参照）、がんばり続ける力を引き出したいと思います。

（九二・四・二二）

ロレトの聖なる家

（ロレトの「聖家族の家」七百年記念祭に寄せて）

神のみことばが処女マリアの胎内に宿られた。この託身の秘義こそ、まさにキリストの御母としての比類ないマリアの尊厳と御子の成し遂げた贖いのわざにおける役割の根拠です。それはまた、キリスト教信仰が聖母に表わす信心の全てと、教会が神の御母を特別に崇敬する根本的な理由ともなっています。まさにそのため、神の御母を信頼するがゆえに、キリスト教世界のすみずみから巡礼者がロレトの聖なる家へと馳せ参じ、マリアの胎内で人となられた神のみことばを称えるのです。

まことにあわれみ深い神は、御母を通じてこの聖所を訪れる人にたえず惜しみなく天からのお恵みを注ぎ、魂と体の健康を与えてくださいます。

ですから、キリスト者としての生活と新たな福音宣教へのさらなる熱意を胸に、この世での勇敢な証し人となるため、ロレトの高位聖職者パスクアーレ・マッキ師の請願に従い、全免償を許可するものとします。条件は通常どおり、秘跡としての赦しを受けること、聖体を拝領し、教皇の意向のために祈ること。ロレトに巡礼し、信心をもって聖なる典礼にあずかる人、少なくとも主の祈りと使徒信経を唱える人が対象となります。（…）

一九九四年九月八日、聖マリアご誕生の祝日に、ローマ、聖ペトロ大聖堂にて。

キリストは清貧の模範

教会シリーズ 25

1

キリストは使徒たちにこの世の事物、特に富を放棄するよう求めました。（マテオ19・21、マルコ10・21、ルカ12・33、18・22参照）貧しさの精神は、全てのキリスト者に対して要求されています。それはこの世の事物からの内的な離脱を意味し、こうしてキリスト者はこの世の事物を他人と分かち合う寛大な者となります。貧しさはキリストへの信頼と愛に生きる人に求められるものです。それは実行を伴うことを前提とした精神です。個人であれ特定の団体であれ、各自がキリスト者としての召し出しにより、社会及び教会における身分や状況に応じてこの精神を実行しなければなりません。貧しさの精神は全ての人に有効であり、福音に従ってそれを実行するのは誰にとっても必要なことです。

2

キリストが使徒たちに求めた貧しさは、時代や人によって限定されたり緩められたりすることのない不変の霊性の現われです。すなわち清貧の精神は、全ての人にとって時と場所を問わず必要なことなのです。それを欠くのは福音に背くことですが、一般のキリスト信者や司祭に全ての所有物を放棄し、所有権を捨てるような過度の貧しさを迫ることはできません。教会の教導職は、この過度の貧しさが必要であると主張する人々を何度も批判し、(DS 760; 930f; 1097) 節度ある考え方と行いを求めてきました。しかし、時の流れを越え、古今の聖人たちの影響を受けて、福音的な貧しさへの召し出しを司祭としての聖別に要求される事柄にふさわしい精神と行動として、より一層の認識を深めてきた聖職者たちの姿はとても励みになります。世界各地で聖職者をめぐる社会的・経済的状況は、個人にせよ団体にせよ現実的に貧しい状態にあることを余儀なくされています。特に団体がその性格上、事業のために多くの資力を必要とする時

説教・講話・書簡等の抄訳

ですらそうなのです。多くの場合、困難で悲惨な状況にありますが、礼拝を行い、慈善を実行し、また司牧や宣教活動を支えるために、教会はさまざまな方法、主として忠実な信者たちの愛に訴えることで克服しようと努力しています。しかし貧しさに新しい意味を見出すことこそ、司祭の生活と全てのキリスト者を祝福するものです。キリストの忠告と勧めにもっと一致することができるからです。

司祭はこの世のものではない

3　これは明確にすべきことですが、福音的清貧は地上のものを軽蔑することではありません。神は創造の計画における人間の協力とその生活のために、地上のものを人間の自由にお任せになったのです。第二バチカン公会議によると、司祭も他の全てのキリスト者も同じく、神を賛美し感謝の祈りを捧げることを使命とし、被造物のうちに示された天の父の寛容さに感謝し、神の栄光を称えねばなりません。（司祭の役務と生活に関する教令、17番）

しかし公会議は続けて「司祭は世の中に住む者であるが、われわれの師である主のことばに従って、この世のものではない（ヨハネ17・14～16参照）ことを常に知るべきである」と述べています。従って、「世と地上のものとに対する正しい態度を見いだす」（同、Pastores davo vobis 30番参照）霊的識別力を得るために、全ての過度の気づかいから解放されなければなりません。これはデリケートな問題です。「教会の使命は世の中で果されるのであり、被造物は人間の人格形成に必要だから」です。イエズスは、使徒たちがこの世での生活に必要なものを受け取ることを禁じず、むしろ宣教活動に関する教えの中で「彼らのもっているものを飲み食いせよ。働く人がその報いを受けるのは当然のことである」（ルカ10・7、マテオ10・10参照）と言われ、この点についての彼らの権利を明言しています。聖パウロは「主は福音を述べる人々が福音で生きるようにと定められた」（Ⅰコリント9・14）と述べ、彼自身「みことばを教えてもらう人は、教えてくれる人に自分の持ち物を分け与えよ」（ガラツィア6・6）と命じています。司祭が地上のものを「主キリストの教えと教会の規則によって許される目的のためだけに」（司祭の役務と生活に関する教令、17番）所有し、用いるのは正当なことです。公会議は、これについて現実に即した規則を定めています。

福音に従い、「貧しさ」の精神を実行することは誰にとっても大切なことです。でも行き過ぎに走らず、「世と地上のものに対する正しい態度」を見い出し、全ての所有物を福音の光に照らしつつ用いるよう心がけましょう。

特に、厳密な意味での教会財産の管理は「教会法の規定に従って、できる限り適任の信徒の助けを得て」なされなければなりません。この財産は常に「神の礼拝を行い、司祭の生活を正当に維持し、聖なる使徒職、特に貧しい人に対する愛の仕事」のために用いなければなりません。（同）　教会での職務によって取得された金品は、まず第一に「自分の正当な生活の維持とその身分に基づく務めの遂行のために」用いるべきです。「なお残余の分は教会のため、または愛の仕事のために使うよう心掛けるべきである。」特に司教も司祭も、教会の職務を個人的に豊かになるためや、自分の親族の利益のために使用してはなりません。「ゆえに司祭は決して富に執着せず、常にあらゆる貪欲を捨て、全ての商売に類することを注意深く避けなければならない。」（同）　いかなる場合であれ、全ての所有物を福音の光に照らしつつ用いるべきことを心に留めておかねばなりません。

4　同様のことは、司祭が世俗的活動に関わったり宗教や聖なるものとは無関係なこの世の事柄の管理経営に携わる場合についても言えます。一九七一年のシノドスは「原則として司祭の役務はフルタイムの仕事である。世俗的活動に参与することがその主要な目的であるとは決して考えられていないし、またそのような関わりが司祭の特別の責任を表すことにもならない」(Enchiridion Vaticanum, IV, 1191) と述べています。これは、司祭も一般の人のように商売や世俗的職業につくことに携わり得るという考え方により、司祭の活動の世俗化があちこちで見られる傾向に対しての表明です。

良き牧者としての心構えで

実際、キリストを無視するような職場との関わりを作るために教会にとって唯一の効果的な方法は、たとえば労働者と共に働く労働者になるなど、その環境で職務を果す司祭の存在であるという状況があります。これらの司祭たちの寛大さは称賛に値します。しかし、宗教に関係のない仕事に携わることにより、その職務や立場が司祭の本来の聖なる役務を二次的なものにおとしめたり、また妨げたりする危険に陥りかねないことに留意すべきです。この危険は経験からも証明されており、このため公会議はすでに、肉体労働に従事して労働者たちと生活条件を共にするには、管轄権保持者による承認を必要とすることを強調しています。（司祭の役務と生活に関する教令、8番）一九七一年のシノドスは、原則として適当であると認められる基準を、少なくとも司祭職の目的を持ったある程度の世俗的な仕事に限るとしています。すなわち「教区司教とその司祭団によって、また必要なら司

不変の教え

教協議会と相談の上、判断するべき」です。(Enchiridion Vaticanum, IV, 1192)

特殊な才能を持ち、よく修練を積んだ司祭が、直接教会に関係のない仕事や文化活動に携わるという特殊な事例があります。しかしこれらはあくまで例外に留めるよう注意すべきです。この場合でも福音と教会に忠実であるために、シノドスの定めた基準を常に適用しなければなりません。

5

このカテケージスを今一度、大祭司、神の牧者、そして司祭の最高の模範であるイエズス・キリストの姿に立ち返って終りましょう。司祭が福音的清貧の要求に従うことを望むなら、キリストは地上のものから離脱した司祭の模範です。イエズスは貧しさの内に生まれ、貧しさに生きました。聖パウロは「主は富む者であったのに貧しい者になられた」と教えています。（IIコリント8・9）キリストに従おうと望んだ者に対して、キリストは自らのことを話されました。「きつねには穴があり、空の鳥にはねぐらがあるが、人の子には枕する所もない。」（ルカ9・58）この言葉は全ての地上的安楽からの完全な離脱を示しています。しかしイエズスが貧困のうちに生きたと考えるべきではありません。福音書の他の箇所には、イエズスが金持ちの家に招待され、もてなしを受けたこと（マテオ9・10～11、マルコ2・15～16、ルカ5・29、7・36、19・5～6参照）、金銭的な必要がある時に援助した婦人たちがいたこと（ルカ8・2～3、23・55～56、マテオ27・55、マルコ15・40参照）、またキリストが貧しい人に施しをしたこと（ヨハネ13・29参照）が記されています。それでも、キリストの際立った清貧の精神と生活について疑う余地はありません。

司教と司祭は貧しい人に近づくべき

キリストと同じ清貧の精神は司祭の行動を超自然的に導き、その態度と生活と姿をまさに牧者・神の人として特徴づけるでしょう。それは金銭に対する無関心と離脱、地上のものへのあらゆる所有欲の放棄、簡素な生活、誰にでも手に入るような慎ましい住居を選ぶこと、豪華なもの、豪華に見えるもの全てを退けることに表われます。同時に、司祭はより一層自由に、神と信者たちのため身を捧げるよう努めるのです。

6

「貧しい者に福音を告げるため」キリストに招かれ、キリストに一致して「司祭も司教も貧しい人々を何らかの意味で遠ざけるようなことがらを全て避けるべき」（司祭の役務と生活に関する教令、17番）であることを付け加えておきましょう。実に、福音的貧しさの精神を自らのうちに育てることで、司祭自身が自発的に貧しさを選択していることが示されるでしょう。その「貧しさ」は、物を分かち合うことに、また困っている人への物質的な助けを含む個人や団体での援助の仕事に携わることに表われています。それは貧しい者となったキリストを証しすることであり、今日自ら貧しく、そして貧しい人の友である多くの司祭によって証明されています。またそれは、教会と司祭の生活に燃え立つ大きな愛の炎です。もし過去に時折、どこかで司祭が富んだ者の中に見出されたのであれば、今日司祭は全教会と共に「新しい貧しさ」の中で第一列目に数えられることを誇りとしています。これはキリストに従って福音の道を歩む上で、大きな進歩です。

（九三・七・二一）

教皇様の動き

●2・25　日本司教団の訪問を受け、次のように話された。「経済的な繁栄のみを追い求めることに疑問を抱く人が多くなっています。人間的・霊的な次元に目を開き始めたのです。ここにカトリック共同体の課題があります。教会のメッセージに真剣な関心を寄せる人々に門戸を開き、便宜をはかること。平和、連帯、正義、自由といった人類普遍の価値（これらはキリストの内に実現しています）に基づく愛の文明を築くために他宗教の信仰者たちと力を合わせることです。」

●2・26　お告げの祈りの後、コペンハーゲンで開かれる社会発展のための世界会議に言及され、「この重要な会議の成功を祈ると共に、人間一人ひとりとその尊厳こそが発展の中心になければならない」と話された。

●3・1　灰の水曜日のミサをお捧げになった。「人は神の呼びかけに無関心でいることはできません。悔い改めの時である四旬節に、父である神、御独り子を惜しまれなかった神との親しい交わりを持つことが必要です。何度も言うようですが、神は私たちのため、私たちを義とするために御独り子を罪人のように扱われたのです。」

●3・2　四旬節恒例の、ローマ市の聖職者たちを迎えてのお話。「信仰共同体としての生きた証を立てなければなりません。教皇と一致し、主イエズスに従い、神を賛美し、愛を込めて人々に仕えることで、世界中の教会を助けるのです。」

●3・11　年に一度の一週間の静修期間を終え、教皇様は同席した人々にお話しになった。「同じ信仰が東と西とを結んでくれるでしょう。東方の兄弟たちと私たちは教会の中で二つの豊かな伝統を形作っていますが、信仰は一つです。」

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料七百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
01130-
8-72393

「教皇様の声」1995年4月号付録

ヨハネ・パウロ2世の新しい回勅「生命の福音」について

ハビエル・エチェバリーア司教（オプス・デイのプレラートウス）

ヨハネ・パウロ2世教皇は「真理の輝き」に続く新しい回勅「エヴァンジェリウム・ヴィテ」（生命の福音）をもって、ふたたび人々の良心に訴えておられます。尊い値打ちがあり犯すことのできない生命について（4番参照）教会の教えを再確認するこの回勅を、私は感謝の心で読むと同時に敬愛の心で受け入れました。新しい回勅は現代社会の態度を診断し、世界に挑戦状を突き付けるというかたちで、新たな生命の文化を提案しています。

すでに回勅のタイトルからして、人間の生命は人間に対する神の愛の福音から切り離すことのできない福音的価値を持つものであると主張しています。教会は、「殺してはならない」という掟を無視することができません。それは人間の理性と社会における共生にとって根本的な要請です。教皇様はいつものように誰にも分かりやすい論拠をあげて、啓示の超越的な光が自然の理性の真理発見を確認し、また是認することを示しておられます。

この回勅は一九九一年の枢機卿会議において表明された枢機卿方の全会一致の望みに従い、世界中の司教方の答申をもとに（62番参照）書かれました。「生命の福音」は神のおことばを根拠にした教えで、教会の聖伝によって伝達され、通常の教導職および荘厳な教導職が教えてきたものです。すなわち、「教会憲章」25番が示す通り、不可謬性を備えているということです。ヨハネ・パウロ2世教皇は荘厳な言葉で、殺人（57番）、目的あるいは手段としての堕胎（62番）、安楽死（65番）が「大変重大な道徳的不秩序」であると強く主張しておられます。この判断は「神の栄光の似姿」である人間生命の「ほとんど神的な尊厳」を守るのが目的です。（84番）

人間の生命に対する脅威はすでにカインの時代に始まっていました。アベルの死について深く黙想された教皇様は、最近、苦しみと死の原因に対する戦いに大きな進歩があったことはご存じです。しかし、まさに今日、人間の生命がその誕生と末期の段階で多くの脅威にさらされていることをも明白に指摘しておられます。これらの危険を受け入れるわけにはいきません。故意に求められた危険だからです。現在のような文化、法律、政治の状況の原因となっているのは、個々の人間の弱さだけではありません。文字通りの「罪の諸構造」と「反連帯の文化」の道具や手段が存在し、それが「死の文化」を招いているのです。（12番と24番参照）

ある種の犯罪は、それが正当化されればされるほど、邪悪な犯罪となります。

法制度が正当化し、国家が保障するという背景のもと、罪なき生命が排除されるだけでなく、良心が混乱させられるようなことが、自由の名のもとに行われるという事態は人類にとって悲劇です。これは人間人格を擁護すると公言する人々の背徳行為です。こうして人格は二度殺されることになります。神の感覚というか神の意識が失われると、生命の排除という極端に走るだけでなく、生命と性を功利的、享楽主義的にしか考えなくなり、出産や苦しみや死に責任をもって対処しなくなるのです。

物事を明晰に見るといっても、それは悲観的になることではありません。慈しみは厳粛な真理と結ばれています。道徳的に重大な罪を犯す人々にこそ、助けと導きが必要なことを教皇様はよく御存じです。大胆な人は決して諦めません。だから、ヨハネ・パウロ2世教皇様は人々の良心を総動員して、共通の倫理的な努力を結集し、新たなライフスタイルを作りだそうと（98番）、善意の人々に呼びかけておられるのです。

私はこの回勅が希望と信頼を与えてくれるという点を強調しておきたいと思います。回勅では、沢山のイニシアティヴを実行に移すようすすめています。種々の職業や文化、政治、情報の世界、あるいは、色々な種類の会や協会組織、そして家庭のそれぞれは、教皇様が世界と教会に提示するこの「生命に仕えるための大作戦」（98番）に加わることができるのです。人類全体が罪なき生命に対してなされるあらゆる暴力に苦しめられています。しかし、生命を大切にする行為の一つひとつ、改心して人間の中に神の似姿を見ることのできる心の一つひとつにおいてこそ、人類全体が勝利者になる道があるのも確かなのです。